

長崎県に於けるドールトン・プランの展開例

——長崎市城山小学校の場合

増 田 史 郎 亮

序

筆者は先年「長崎県における新教育運動の展開——ドールトン・プランを主として」という一文を書いた事があるが、本稿は言わばその折、書落されていた部分の補遺に当たると言ってもよい。筆者がその欠落に気がついたのは、皮肉な事に上記論文が印刷に付された直後、偶然の機会から城山小学校第十二代校長であった佐藤武夫氏と逢い、雑談中、同氏より大正末期城山小学校でドールトン・プラン(ドールトンという発音は岩波小辞典『教育』によった)が実践された事を知らされてからであった。私は驚き、喜び、且つは自己の無知を恥じた次第であった。言う迄もなく、私は氏に数々の質問の矢を浴びせた。氏は既に同校より創立40年記念誌が出版されている事、初代校長高梨秀善氏が広島高等師範学校出身者でドールトン・プラン実践のためわざわざ島根県から招聘された事、当時の先生、柿田スミさんが健在である事等を語り、長崎県の新教育運動史については只今、藤島武清氏が執筆中で、近日中、玉川大学よりシリーズとして発刊される「日本新教育百年史」の該当箇所に城山校のそれも掲載される筈である旨を告げられた。私は直ちに城山小学校を訪問し、記念誌を入手したりして研究の手筈を整え始めたが、同校の資料一切が原爆で失われているため、当時の先生、生徒であった人を探し出し、それらの人々から当時の模様を聞き出す以外にアプローチする手段はあるまいと心に決めたのであった。然し、一方ではその翌年に控えた渡欧準備の多忙さもあって、前記百年史の出版に期待を寄せつつも、その研究を一旦休止せざるを得なかった。藤島氏のその一文が出版されたのは筆者の一年近い滞欧生活が終わる数ヶ月前の事(昭和46年2月)であるが、私とその文の中で見た本稿関係の部分は以下の数行の文字のみであった。「ダルトン・プランの実践者、高梨秀善。島根県松江市の出身、広島高師卒。島根県でダルトン・プランの研究発表を行ない、全国的にその名を知られていたが、請われて大正12年5月、32歳で長崎市の城山小学校初代校長となる。ここでもダルトン・プランについて意欲的にとりくみ、実践活動を展開した。惜しいことにその後、本校は原爆被災校となったため、当時の資料が見られないことは残念である。」と⁽¹⁾ 一切の資料が焼失しているだけに如何なる論の展開がなされるのかと実は私は多大の期待と興味とを寄せていたのであるが、結果は以上の通りであった。藤島氏の一文は長崎県全般の動向を述べたもので、城山のそれに中心に置いたものでなく、城山それ自体も資料一切をなくしているのであってみれば、恐らく以上のようにしか書く外はなかったのであろう。然し、何れにせよ、今のままに放置すればその貴重な実践の跡も風化して消失してしまうことは明かである。聞き書き的手法を用いた補遺ではあるが、敢て本稿でとりあげた所以である。

尚、本稿は補遺であるので、先の論文と重複する部分があるが、本稿に特に必要な部分は再説し、そうでない部分は簡略に述べるか、全く省略してしまうかする事を先ず断って置きたい。

1 大正の時代的情況

第一次大戦は日本に異常な発展をもたらした。それは大戦による欧米諸列強の中国よりの一時的後退、それを利用した日本の帝国主義的侵略と広大な市場の開拓等に起因するものであった。そしてその折の日本の躍進を特徴づけたのは著しい資本の集中であった。この時代は独占的金融資本確立の時代でもあった。

以上のように、急激に発展した日本ではあったが、それが急であればある程、他面では前代から取り残された諸矛盾を強く露呈しなければならなかった。帝国主義的侵略、中小企業と外資導入、農村の諸問題等がそれである。

大戦後の諸変化は当然労働運動にも新生面を開いた。労働者や労働運動の激増、労働者や農民の政党組織等がその現われである。

大戦はまた農民にも大きな変化をもたらした。農業は大戦を契機として一時は好転したかに見えたが、それも一時期の事で、急速に沈滞し、農村の窮乏化、農業恐慌が見られると共に、小作争議の頻発、農民組織の急速な発展も見られた。

他方、婦人問題も社会の耳目を聳動せしめた。婦人団体の結成されたものも多かった。

大正11年には共産党が結成され、少数精鋭主義か、結合主義かを廻って論争が行なわれた。

大正期に見られた顕著な社会現象の一つは新しい思想の抬頭であった。第一次大戦に際しての我が国の中立国としての経済的利益と参戦国としての政治的利益の上に生れた民主主義思想の流行、さらにその経済的好況の裏にある「陽のあたらしめ場所」に発生した労働者・農民解放の思想・運動の盛り上り、労働者の苦闘の歴史とロシア革命の刺戟の上に成立した共産主義思想の浸透（これら労働者、農民運動や共産党成立の事は前述した）、また以上の諸事態にバックアップされ乍ら芽生えた所謂大正期の教養主義・文化主義・ヒューマニズムの開花などがそれである。

所で上述の諸現象を生み出した思想的地盤を端的に表現すれば大正デモクラシーと言う事が出来る。それは日本資本主義が帝国主義への転換を遂げた後の段階に、士族インテリ、地主、ブルジョアジー、中・小農民層を母体として展開された民主主義的な大衆運動であったのである。従って、この運動は本来、社会主義革命への転換を含む革命的ファクターを含んでいたのである。然し、デモクラシー運動の前半期、所謂「米騒動」以前の段階に於ては、労働者階級、革命的国民層は自己陣営の利害を反映する組織を政党、そして一貫せる自己の理論を持ち得なかったのである。従って、そこから必然的にこの運動のヘゲモニーは、帝国主義期の、社会主義との対決を強いられたブルジョアジー、地主及びそれらの利害を代弁した政党に握られたのであった。

民主主義運動は二個師団増設の要求を拒否された陸軍が起した、所謂陸軍のストライキに対するブルジョアジーや民衆の怒りに先ず端を発する。かかる軍閥の暴挙に対する閥族打倒、憲政擁護をスローガンに掲げた第一次護憲運動が澎湃として起ったが、この運動の担い手は当時、金融資本家や産業資本家であった。彼等は絶対主義的権力機構の中において自己の位置を高めるべく、労働者・農民を始めとする国民大衆の革命的エネルギーを利用し乍ら、元老、軍閥、官僚の専制支配を拒否したのである。かくてデモクラシー運動の主導権は彼等の手中に握られたのであるが、それにしてもこの運動が推進されたのはその背後に労働者・農民等の革命的エネルギーがあればこそその事であった。

併し以上の運動も中期の「米騒動」を転機として新しい様相を呈するに至った。爾後、社会主義者の復帰、知識層の急進化と共に同運動の組織化・理論化が見られるようになったからで

ある。堺利彦等の戦列復帰，河上肇，吉野作造等の活躍，第二次護憲運動の展開，「普通選挙法」の成立等がそれである。かくてデモクラシー運動の指導権も次第に労働者階級，革命的階層の手に移行するに至り，「普通選挙法」の成立を以て，デモクラシー運動も一応その政治的プロセスを終了する。然し，以上の如く一段の進展を見せたこの運動も後述のように遂にはその限界を脱し切れなかったようである。

大正デモクラシーの代表的理論家としては吉野作造，美濃部達吉，尾崎行雄，大山郁夫，長谷川如是閑，小野塚喜平次等を挙げる事が出来るが，就中，吉野作造をそのチャンピオンとする事にさして異論はないであろう。所で吉野作造の著名な論文「憲政の本義を説いて其有終の美を済すを論ず」によれば，彼の説く民本主義は主権在民の立場に立つ所謂「民主主義」とは明確に区別された，旧帝国憲法と衝突しない限りのブルジョア的改良主義に立つものであり，絶対主義的天皇制との対決を回避した立場に立つものであった。その批判の鋒先もブルジョアジーに対しては殆んど向けられず，専ら旧藩閥絶対主義階層に向けられ，一方社会主義思潮との間にも一線を画する事を決して忘れなかった。結局の所，吉野の民本主義は，絶対主義的天皇制を一部修正したに止まり，その民主主義的要求を貫徹するに至らぬという限界をもつ事は明白であった。吉野理論と同様，他の諸家の理論も亦，その表現こそ違え，何れも明治憲法の枠内に於ける改良主義的理論の域に止まった。無論，当時の政治権力の源泉である天皇制を云々する事は到底夢想だにし得ぬ事であったろう。我々はこの運動がそれなりの使命を果たした事を認めねばならぬと同時に，またそれが以上の限界をもつものであった事も忘るべきであるまい。(2)

2 大正年間の自由教育運動

前述せる如き大戦後の我が国経済界の活況を基盤とし，滔々として入り来たった民主主義思潮，後述の新教育思想に促され，日本教育界には嘗てない種々の教育思想や運動が陸続として起った事は周知の通りである。

代表的主張としては河野清丸の自動主義（1914年），木下竹次の自律的学習（19年），手塚岸衛の自由教育（19年），北沢種一の作業主義（20年），千葉命吉の創造教育（20年），樋口長市の自学教育，稲毛金七の創造教育，小原国芳の全人教育，片上伸の文芸教育，鈴木三重吉，北原白秋，山本鼎の芸術自由教育等があり，それらの実践的展開例としては西山哲次の帝国小学校（東京），及川平治の明石女子師範付属小学校，中村春二の成蹊小（東京，1915年）河野清丸の日本女子大付小（16年），沢柳政太郎の成城小（東京，17年），木下竹次の奈良女高師付小（19年），手塚岸衛の千葉師範付小（19年），千葉命吉の広島師範付小（20年），羽仁もと子の自由学園（東京，21年），山崎博の神奈川県田島の体験学校（21年），野口援太郎の池袋児童の村小（24年），赤井米吉の明星学園（東京，24年），北沢種一の東京女高師付小（25年），桜井祐男の御影児童の村小（25年），その他長野師範付小（17年），愛媛県大町小（19年），東京市横川小（19年），福井県三国南小（20年），岡山県倉敷小（21年）等がある。

以上の主張，実践に最も関係の深かった欧米輸入の新思想の主なものとしては吉田熊次，入沢宗寿，篠原助市，大瀬甚太郎，乙竹岩造，原田実，稲毛金七，中島半次郎，帆足理一郎，赤井米吉等の諸家によって紹介されたブッデの人格的教育学，ケルシェンシュタイナーの劳作教育思想，ウェーバーの芸術教育論，ナトルプの批判的教育学，デューイの実用主義的教育学，エレン・ケイの自由主義教育思想，モンテッソーリーの自動教育説，キルパトリックのプロジェクト・メソッド等がある。尚，先の河野の主張，実践がモンテッソーリーの説に依り，北沢

のそれがキルパトリックの説に基づいたものである事は周知の通りである。

以上の如く、大正期の新教育運動は児童の個性と創造性を尊重し伸ばすという一点に向って多彩な装いを凝らし乍ら、全国を風靡した教育改造の運動であった。それも、これを受入れるような客観的情勢があればこそその事であったが、それにしても、この運動は、日本教育史上、嘗てない特筆大書すべき出来事であった。

ヘレン・パークースト (HELEN PARKHURST) 女史のドールトン・プラン (DALTON PLAN) も以上の動きの一環として長田新等によって紹介され、熊本県立第一高等女学校、本県盈科小学校等で実践された。その詳細は後述する。(3)

3 ドールトン・プランの成立・導入の過程

以上がドールトン・プラン出現前後の諸背景である。所で同プランが如何なるプロセスを経てアメリカで成立し、日本に導入されたか、その概要は以下述べる通りである。

同プランがパークーストにより創始されたのは1920 (大正9) 年の事であるが、それが創出される迄の過程は大意以下の通りであった。

彼女は1887年の生れであるが、彼女20才 (1908年) の頃、それ迄の単級小学校、中学校、師範学校の教師の経験を基にして教授法に就いて種々思いを廻らしつつあった矢先、彼女は偶々手にしたスウィフト (E. J. SWIFT) の著 MIND IN THE MAKING によって教育的実験室の構想を暗示されたと言われる。1911年、8才から12才迄の子供に対する実験室案を考え、13年にはそれを完成した。翌14年、イタリアに赴いてモンテッソーリー女史の許で研究、翌年帰国後、モンテッソーリー法を参考にし、又、個別指導法のバーク (F. BURK) の好意によって実験室案を試みた。19年、バークシャーの不具者の学校でそれを実施して成功し、翌年、彼女の故郷マサチューセッツ州ドールトン町の中学校で実施して一躍有名になった。その後、彼女はニューヨークに児童大学学校を設立し、そのプランの適用を青年に迄延長した。彼女は又、ジョン・デューイから経験を、エマーソンから児童尊重を学んだ。「恐れを知らぬ人間」の形成を教育目的とし、その目的実現のための経験の場として実験室という環境を考えた。教育の基本的方針として(一)生徒の一人一人が自己の興味を追求し続ける事が出来るという自由を尊重し、(二)グループ活動、協同活動の精神をもとりいれ、(三)すべての学習活動を生徒達が自己の能力と興味に応じて時間的に自分で予定して進めるように、教師と生徒の間で契約、割当てをきめるという学習方法をとった。同プランは各国に大きな影響を及ぼし、我が国でも各地で実施された事は後述の通りである。

所でドールトン・プランが我が国に伝えられたのは種々のルートを通じてであったようである。一つは直接女史にも会い、プランの実際も見た沢柳政太郎、長田新等成城小学校関係者の紹介、翻訳、実践を通じてであり、他の一つはプラン創始間もなくイギリスにそれを紹介したロンドン・タイムスの記事、案を紹介したエヴリン・デューイ女史の THE DALTON LABORATORY PLAN 1922から刺戟を得た吉田惟孝、帝国教育会、吉良信之の著述を通じてであった。勿論、この二者の中、前者成城小学校を中心として同プランが日本全土に普及した事は言う迄もなかった。

成城が同プランを実践し始めたのは大正12年以来であるらしいが、同13年12月、成城の教育問題研究会が出版した「ダルトン案の主張と適用」によると、吉田惟孝の熊本県立第一高女の外、岩手県大迫小学校、富山師範、愛媛師範、福井師範各付小、福井県三国南小学校、本県盈科小学校で実践せられている由であるので、大正12年から13年にかけて、成城がその中心となって「全国にかなり多数のドルトン・プランの同志を作った」と見てもよいようである。

以上の状況の中に、成城の前記研究会と大阪毎日新聞の共同招聘によってパークスト女史が来朝し、東京を始め全国各地を廻って講演する事が重なったので、それを「期としてドールトン・プランは全国的に流行するに至った」のである。

尚、以後、同プランを実施した学校として岡山県倉敷小学校、福岡県大牟田市各小学校、東京市明星学園があった事を付加しておく。^{〔4〕}

4 長崎県における新教育実践の諸背景

前述の如く、本県盈科小学校を始め多くの学校がドールトン・プランを実施したが、後にも述べるように中でも盈科小学校はその優なるものの一つではなかったろうか。梅根悟氏が「日本の新教育運動」なる一文で「ことに壱岐の盈科小学校はきわめて熱心な実施校であった」と言う通りである。

偕、城山小学校での実践に触れる前に、盈科小学校を含め、長崎県内の諸学校に何故、ドールトン・プランを始め新教育諸思潮が導入されたかを瞥見しておかねばなるまい。

それらが導入されるに至った第一の理由は上記の我が国内の政治的、経済的、教育的動向の影響が考えられる。第二の理由は第一の理由に挙げた動向の本県的反映が本県内に見られ、その影響を受けたという事であろう。本県政界にデモクラシーの高揚が見られた事は、中立派を中に挟んで、政友会、憲政会の二大政党対立の状態があった事等に察せられ、第一次大戦を挟んでの経済的繁栄が、農業、殊に工業、中でも造船鉄工関係の生産の増加に見られ、ストライキが本県でも発生した事は大正中期から末期にかけての重誠舎印刷所、端島炭坑、三菱長崎造船所、長崎電鉄等々のそれに窺われる。

尤も大正12年の東洋日之出新聞の記事には「減少しつつある 長崎対支貿易」、「県財政緊縮」、「税金滞納者は九州で長崎最も多し、これ不景気を物語る証拠」という見出しが散見されるのは後述の城山小学校の事に関連して見落されない。

尚、以上に関連して大正8年より14年迄篤志家熊本利平（壱岐出身で電力王として知られた松永安左エ門の義弟）が毎年、多額の寄付をし、実はそれによって成城小学校への壱岐の教師派遣、パークスト、沢柳政太郎、小西重直、長田新、小原国芳、奥野庄太郎等の招聘等々も可能ならしめたのは特筆に価する。それは上記の本県的反映云々を如実に裏書しているし、本県、特に壱岐のドールトン・プラン展開の経済的背景と同時に大正期らしい雰囲気も知らしめてくれるようである。「壱岐郷土誌」三によると熊本は大正10年より14年迄毎年5,000円余を寄付したとあり、小原国芳の「夢みる人」には大正9年、郡立壱岐高女の建設費を寄付し、大正8年から14年迄毎年3,000円を郡教育界に寄付した外、大正8年から14年迄石田小学校長の俸給100円の寄付、成城学園への7年間に亘る派遣費の補助、沢柳政太郎、長田新、小原国芳、パークスト等の招聘費の補助、郡内各学校への新教育関係図書の多数寄贈、壱岐奨学会の創設とそれへの30,000円の寄付をも行なったとある。^{〔5〕}

因みに当時の県議会議事録は本県教育界内に県外のデモクラシー思潮が浸透しつつあった事を示すと共に教育界の体質と為政者層のそれに対する態度をも知らしめるようなので、ここで簡単に紹介して置きたい。

「現在の中高等学校の立憲思想養成に関する教育は甚だ不充分であると思われるので、その養成をして貰いたい」（大正5年、岩永議員発言）。

「現代の青年は……デモクラシーという新語を有難がって、自由気儘にしていと解釈し、市町村自治の根底を破壊するような事が今芽を出している……これを矯正する途は補習教育に

よる外はないと思う」(9年, 志波議員発言)。

「女子教育の目的は良妻賢母を作るにあるが、……最近の傾向ではお父さんは頭が古い、お母さんは旧式、女大学は女を奴隷にするもので近頃流行らないと言い、姦通して首を縊った有島武郎に随喜したり、性の解放や恋愛の自由を叫んで三角や四角の同盟を作ったり、偶々嫁に行けばサンガー夫人に帰依して、早く子供を持たないようにする。……そうした良妻賢母では日本の将来が心配であるが、当局はこの点どう考えておられるか。……日本にもあらゆる思想が輸入されている。従来は日本の伝統的精神、大和魂で消化したから無難であったが、輸入が多いと消化不良になる。思想善導は現内閣の最も力を注いでいる所であるが、思想の善悪の評定は何を目標に行なわれるか。多数が力である事は証明を要しない公理で、陛下の御信任になる内閣も多数の力を以てすれば倒すことが出来るという争われない事実を教育の上にごう取扱われるか。……保守頑迷は進化の敵であるが、余りに新し過ぎるのもいけないと思う。教職員が新学説を採り、新研究をするのを非難しないが、書物は仲々上手に説いてあるので新思想にかぶれて県教育界に危険思想を伝播する恐れがある。教職員の思想問題に対し如何なる態度で監督されるのか。教職員の愛読書について調べた事があるか。」「女子教育は良妻賢母主義で、社会に適応する女子を養成するよう全職員努力している。……県の指導目標は日本古来の道徳律の範囲と考えておる。従ってこれに反するものは受入れるべきではないと思う。多数が政治の原則であっても、学校問題は夫々指導監督の機関もあり、……時事問題で社会一般の批判の定まっていないものは、学校で扱わぬがよいと思う。教師の思想問題は一々調査する訳にも行かぬが、甚だ不適当な思想の所有者は職を去ってもらうより外仕方ないと思う。愛読書の調査はしていない。」(13年, 斉藤議員と玉置参与員との質疑応答)。「普通選挙……が近く施行されることになったが、公民教育、政治教育と言う面にごうした考慮が払われているか。」「先ず教職員に十分な知識と理解を与える事が先決問題と思うので、……関係教師の講習会を開いて……」(14年, 斉藤議員と福元参与員の質疑応答)。

尚、以上の議事録に関し、付言したい事は、新教育運動に対して、若干チェックを加える如き動きが本県会の以上のような雰囲気の中に果してなかったか否かという事である。以上の事のみでは明確に押えられぬが、決してありえぬ事ではなかったと推察する。(6)

5 長崎県下の新教育実践

本県教育界内に新教育思潮の紹介、実践があった事は以下述べる通りであるが、その前にそれらに関する文献に関して一言言及して置きたい。というのは、後述するようにそれを通して、新教育に対する本県の意識の高さも測れると筆者は考えるからである。

大正期に於ける本県新教育運動に言及した著書と言えば、戦前では上記「壱岐郷土誌」三のみで、他は専ら戦後のものに限られ、時代順に並べると梅根悟「日本の新教育運動」(昭和26年)、佐世保市「佐世保市史」教育編(昭和28年)、大村市「大村市史」下巻(昭和36年)、玉川大学出版部「日本新教育百年史」8、九州、沖縄(昭和46年)である。戦前、昭和17、18年には「長崎県教育史」上下2冊を送り出している。本書は本県教育会は全国各県教育史の中でも珍しい程、最も資料を豊富に掲載した浩瀚なものの一つであるが、にも拘らずその著書も、大正年間の項で新教育に触れた箇所は一つも見当たらないのである。上記「佐世保市史」「大村市史」も折角それを記述し乍らも、その発生、終末の年月を明記していない。詰り、本県教育界によって書かれた本格的な本県大正新教育史は上記、昭和46年出版の「日本新教育百年史」8を以て嚆矢とすると言うべきであろう。無論、全国各県ともにそれぞれの新教育運動を自覚

的に描き出し始めたのは恐らく戦後の場合が多いであろうし、この事で以て単純早急に本県教育界の意識の高低を云々するのは当を得ないかも知れない。が、それにしても、以上の全国的傾向を念頭に置き乍らも、それらと共に本県教育界の意識の高さにも若干の問題を感じぬ訳には行かぬ。ともあれ、筆者の調べた所と、「日本新教育百年史」とをつき合わせると本県新教育運動史の概観は以下のようになる。

大正6年 諫早にて古賀篤介、動的教育を実践。

同 8年 壱岐にて及川平治の動的分団式教育法の講習会開催。

同 10年 成城学園の小原国芳、奥野庄太郎壱岐にて講習会開催。

同 11年 小原国芳壱岐にて講習会開催。壱岐より藤井利亀雄を成城小学校へ長期派遣、以後、毎年1名ずつの成城への1年留学が昭和8年迄続く。

同 12年 壱岐にて京大教授、小西重直の講習会開催。成城学園、沢柳政太郎の来島。壱岐より山口一行、柴山鼎の成城派遣。同年より13年迄、長崎市城山小学校にてドールトン・プラン実践。

同 13年 パーカスト女史、長崎中学校で講演の後、壱岐に来島、講演。壱岐にて赤井米吉（明星学園）、奥野庄太郎（成城学園）、長田新（広島高師教授）の講習会開催。中尾正を壱岐より成城小へ派遣。

発生、終末の年月不明の大村、佐世保では以下の試みがなされた。

大村……自由学習の時間、自由発表用の黒板、教壇の撤廃、自治集会等々。

佐世保……自由教育（自由画、選題主義作文も含む）、郷土教育、労作主義教育等々。

以上の事から筆者は次の如く推察する。県内早い地域では大正6年頃より新教育実践・研究が始まり、それが大村、佐世保に見る如き形で一般に広がって行ったのではあるまいか（勿論、前述又は後述する如く、かかる動きを若干チェックするような動向もないではなかったと思われる）、そしてその尖端を切ったパイオニアが「教育王国」壱岐ではなかったろうか。ドールトン・プランを中心に県内新教育の流れを見て行くなれば、以上述べた如き本県又は壱岐の新教育運動の動き（ドールトン・プランもその一つであるが）を背景とし乍ら、壱岐、特に盈科小学校がプランのセンターとなり、大村市史、佐世保市史に見る如く、新教育一般（ドールトン方式を別個にとり出すならば）の動きに影響を与え乍ら推移して行ったと見てよいのではないかと筆者は考える。勿論、ドールトン・プランに（プラン以外の）新教育研究、実践一般が与えた影響も無視出来ず、この両者は相互的に影響し合い、入れ雑ったと実は見ねばなるまい。筆者の見る所ではドールトン・プランが（プラン以外の）新教育一般に影響を与えた面は別として、その純粋な形をとったのは盈科小学校、或は精々壱岐島に限られたのではないかと考える。後述の如く、本稿で取扱う長崎市城山小学校のドールトン・プランは筆者の見る所では同プランそのままではなく、同プランを骨子とし乍らもそれに分団式動的教育法などを加味したものであったと考える。乏しい資料からの推察で誤りない事を保し難いが、只今の筆者にとって見得る限りの諸種の資料からすれば以上の如く考えざるを得ない。尚、新教育一般にせよ、その中のドールトン・プランにせよ、その動きは日本全土、本県の政治的、経済的、思想的、教育的諸種の背景、動向と密接に関連し乍ら動いた事象であった事は言う迄もない。

6 長崎市城山小学校に於けるドールトン・プランの実践

上記の如く、長崎市城山小学校に於てドールトン・プランが試みられたのは大正12年から翌13年にかけてであるが、それをより詳細に言えば以下の如くなる。前に述べたように本校は原

爆被災校であるため、資料一切を失っているの以下筆者が述べることは現存の当時の先生の回想談、同校の創立40年記念誌に載せられた当時の生徒諸氏の回想文、「日本新教育百年史」等を素材としている。筆者は本稿完成間近になって、城山小学校長神浦孫一郎氏より第二代校長桑原恭助氏の現存とその住所を聞き出し、筆者の親戚野田几子、その知人荒川文子さんの紹介で当時の生徒諸氏とも逢えるルートもつけられ、筆者の調査で初代校長高梨氏の広島時代の同級生木下永二氏その他諸氏の現存とその住所を知る事等も出来たのであるが、逢って聞き書きする時間がなかったのは遺憾この上ない事であった。又、本稿に掲載している以外の写真、特に当時の授業時の写真も随分探したが、本稿完成迄は入手出来なかった。これらは後日を期したい。



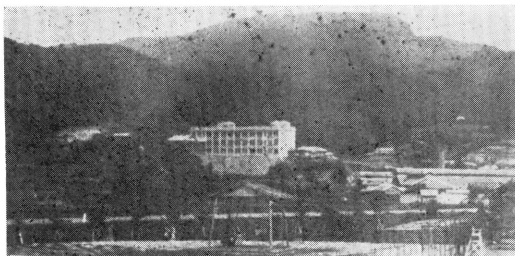
第二代 校長時代の諸先生達と高等科生徒達
柿田スミさん所有写真帳より転写



城山校創立当時の諸先生達

宮 高 大 樋 目
内 梨 園 口 良
渡 白 近 河 石
辺 河 藤 野 田
大 長 柿 町 津
平 崎 田 田 田

創立40年記念誌より転写



←城山校創立当時の校舎（浦上医大方面より写す）
創立40年記念誌より転写

城山尋常小学校が創立されたのは大正12年4月12日で、当時の教師、柿田スミさんによると、稲佐、銭座、山里各小学校から生徒を集めて12クラスで学校が始められたという事である。当時の校区は今よりも広く、現在の大学病院の下なども同校区に所属した由である。

記念写真によると教師陣は高梨校長を含め男子教員8名、女子教員7名計15名である。高梨校長の事は後に述べるとして、柿田スミさんは女子師範部卒業5年目で式見校、稲佐校を経て城山校に赴任、渋谷亮三（旧姓宮内）氏は師範二部卒業早々であったという。柿田さんの記憶では首席訓導樋口氏は勝山小より赴任、河野氏、石田氏はそれぞれ付属小、山里小より赴任、大園源衛氏は鹿児島県甕島の出身、目良氏は学年途中で壱岐に帰郷、図画の専科の渡辺氏は島根県出身であるが、同県人高梨氏に招かれて赴任したか否かは判らないという事であった。白河さん、長崎さんは代用教員、大平さんは女子師範新卒、町田さんは小島小より、津田さんは島原より赴任された由である。高梨氏以外、教師陣のことで判明した事は以上の通りである。

渋谷、柿田両氏の記憶を総合すれば初代高梨校長は島根県松江市出身で広島高等師範学校卒

業後、松江市でドールトン・プラン実践中に、友人の市の視学山崎哲三氏の招きで城山校に赴任したとの事であった。大きな感じのする人であったと言う。筆者が広島高等師範学校文理科大学六十周年記念同窓会の名簿で調べた所によると、高梨秀善氏は大正9年広島高等師範学校教育科卒業、或いはと思って調べた山崎哲三氏は大正10年同校教育科卒業である事が判った。視学山崎氏は渋谷氏の言によると敗戦後、五島中学校に赴任したとの事でもあった。とも角、高梨校長は広島時代の1年後輩の市視学山崎氏の招きを受けて新進気鋭、32才の若手校長として城山校に赴任、創設の任に当たったのである。

因みに両氏が卒業した高師教育科というのは修身、公民、教育の中等教員免許が取得されるもので、単位をとれば勿論、他の学科の免許もとれた。同窓とは言え、中等教員免許所有者を創設の校長に据えたというのには市の意気込みも感じられる。第四代校長吉田正夫氏は「市当局は城山校を長崎の模範校にもと、第一代、第二代の校長は当時中等教員の免許状をもった錚錚たる人物を配置したものである。」と言う。⁽⁷⁾

高梨氏自身も抱負を抱いて赴任したに違いあるまい。渋谷氏は力を込めて、理想に燃えて氏は赴任したのではないかと筆者に語られた。当時の教師、生徒が異口同音に誇らしげに言うのは、九州で最初の、従って長崎市最初でもある鉄筋コンクリート建の校舎の事であるが、その堂々たる学校をとりまいている市街も長崎市最初の計画的市街地、そこに住む父兄は三菱造船関係のサラリーマン、高級軍人を始め、官庁、学校関係者等インテリが多く、初代校長と親交があり、二代、三代、四代の諸校長に仕え、創立当時の城山について詳しい大島義喬氏は、「その頃は父兄の学校に対する関心と協力は格別で、自負と誇りにみちていました。そのためわざわざ初代高梨校長さんをわざわざ島根から招くなど、城山を名実ともに九州一の学校に育てようと張り切っていたものです。」⁽⁸⁾ と言い、「二代目桑原校長さんになると……研究発表会をやると、先生方より父兄の方がはるかに多くつめかけて、討議にも参加し、熱心に傍聴する程でした」とすらしい。⁽⁸⁾ この視学、市当局にして、この父兄あり、それらをまた象徴するかの如く長崎市初の計画的市街地、県営、市営住宅また九州最初で長崎最初の鉄筋コンクリート建の校舎があり、これらが一線の糸につながってドールトン・プラン実践を招き寄せたという感じが筆者には深い。

無論、創立当初から学校、学級の運営、授業がうまく行ったのではない。しばらくは教具もなく高学年は作業、低学年は校外教授をしたようである。同年5月には高等科も併置されて城山尋常高等小学校となったため、特別教室も二つあったのを一つを高等科用教室にし、当分他の一つを図画教室にしたが、後述のように後になると生徒が激増して来たので、1、2年を複式にして特別教室もなくなってしまったと言う。

週2回位は教育についての研究会があり、校長室で校長よりドールトン・プランについての講義を受け指導をうけた由であるが、その際、校長は先生達にどちらからでも見える山を例に引いて、教師は山の場所を教えるが、登るのは子供の自由に任せよ、そのように子供に自由に研究させ、最後は教師がまとめる方式をとればいいと屢々言ったという。柿田さんは、従来の講義式が児童中心に変わった事を知り、教育の本当の意味が始めて判ったと筆者に繰返し述べた。

又、高梨氏はグループを作る事をすゝめ、図画もグループ式にし、机の配置も授業の関係でどんなにしてもいい、問題になったら全責任を自分が負うと口癖のように言ったという。今では何でもない事であるが、当時は非常に珍しかったと柿田さんは言う。

特別教室が一つに減った時があった事は前述したが、その頃（2学期頃）から高学年は移動

教室にした。当時の生徒であった井手村太郎氏（第1回入学）はその時の事を次の如く回想している。「忘れられない思い出の一つとして当時採用された移動教室式授業『ダルトン・プラン』を受けた事です。科目毎に設けられた教室に移動して、或る時には次の教室が空くのを待ちきれなくて、先生の目を盗んで屋上に駆け上って大天幕の下でカバンを投げ出して暴れ廻り、先生から一発やられると言った事も幾度かありました。」と⁹⁹尤も移動教室もたゞダルトン・プラン実施のためにのみ試みられたとばかり言えない。後述のように児童が増加して教室が不足して、そのために考え出されたものでもあるらしい。大島義喬氏はこの事を記念誌の中で指摘している。¹⁰⁰

ダルトン・プランの研究授業は石田氏により2回開かれ、第1回目のは理科の授業でグループで発表させ、机間巡視で質問に答え、最後に教師がまとめるという方法をとったと記憶しているが、第2回目のは失念したというのが、柿田さんの話であった。

外部より参観者は多かったかとの筆者の質問に対する柿田さんの答えは、余り記憶がない、一部卒業の同窓生2人と壱岐出身で二部卒業の原田さんの3人が参観したのだけは覚えているとの事であった。

柿田さんによると「校長先生は又非常に運動が好きな方で、月に何回か放課後、視学の先生も遊びに見えて、庭球やピンポンの練習があり、とても楽しい日々でした。校長室の応接台もピンポン台に利用出来る様にと設計して作られた位です。」と言う。¹⁰¹

又、井手村太郎氏は「校舎の西側は小さな林になっており、こゝに林間教室が設けられて、初夏の頃から若葉に包まれた自然の教室で学習をしたのもなつかしい思い出になっております。」と言っている。¹⁰²之も新教育的動向の一環として考えられていたのであろう。

こゝで高梨秀善氏の指導したダルトン・プランについて若干の注釈を加えて置きたい。というのは、後述の如く彼の実践した方式は純粋なダルトン・プランでなく、色々なものが加味されていたからと見られるからである。

前述の如く、高梨氏が広島高師を卒業したのは大正9年、その後、島根県松江市で新教育に活躍し、城山小学校に赴任したのが大正12年なので、大正10年前後の広島県、島根県の新教育運動の状況を見れば、氏が如何なる方向の影響を受けたか、大方の推察はつけられよう。因みに柿田さんが氏は「島根県の学校で当時最も新しい教育であるダルトン・プランの研究発表をなさって全国的に名を知られた方だと伺いました」と言うので、¹⁰³高梨氏の実践を「日本新教育百年史」7中国、四国で探してみたが残念乍ら見付からなかった。

翻って大正10年前後の広島はどうであったか。当時の広島高等師範学校では、付小理事と高師教官を兼ね学校劇等で影響を与えた小原国芳は既に成城学園に去っていたにしても、高師学生、県師範生にその影響が残っていたらしいし、付小では小原とも一緒に活動した田上新吉が綴方教育、山本寿が音楽教育で当時活躍していた。明治44年高師教授として赴任した教育学者佐藤熊次郎は昭和11年退官する迄その職にあり、その間付小主事を20余年も勤め、大正8年高師講師、9年高師教授になった教育学者長田新は10年、沢柳政太郎、小西重直、下村寿一、伊藤仁吉と欧米各国の教育視察に出張し、心理学者久保良英が高師教授になったのは大正11年の事であった。

広島師範学校には千葉命吉がいた。彼は、大正8年付小主事として赴任し10年8月の例の「八大教育主張」で「一切衝動皆満足論」を唱えて社会の耳目を聳動せしめたが、同年9月の寄宿生の総脱出事件や原因不明の付小火災事件の責任を引被るような形で師範を去った。然し、彼の影響を受けていた桧高憲三が健在で、大正10年には千葉命吉の教育主義を反映する「西条教

育」を始めた。¹⁴⁴

一方、その頃の島根県下の状況は大要以下の通りであった。本県には大正6年、及川平治の分団式動的教育法などが既に紹介され、大正11年には同県能義郡布部村小学校長増田近一の上記教育の影響を受けた「自由教育」が始められ、翌12年には増田近一から招聘された千葉師範の手塚岸衛の「自由教育」の講習会が開かれた。「日本新教育百年史」によれば、県下に与えた増田近一の影響は甚だ大きかったと言う。¹⁴⁵ その他、県下では大森有吉の「全人教育」、岸栄の「分団学習、自主学習」、青木実三郎の「自由画教育」等が主張、実践された。これらが中央にあった新教育運動の影響を何等かの形で受けたものであった事は言う迄もない。¹⁴⁶

高梨校長の実践した教育方式の中にはドールトン・プランそのものにある生徒と教師との間の契約や割当、図画手工や体操に於ける共同作業もあるべきであるが、それが明白な形で当時の教師や生徒であった人達の印象に残っていない所を見るとその部分が欠落していたとも考えられ、それに以上の広島、島根両県下の諸状況を重ね合せて見ると、高梨氏の方式はドールトン・プランを主軸にして、それに以上にあげたような諸新教育主義、殊に分団式動的教育法が接合されたものではなかったかと推察される。氏が城山小学校に赴任する前には松江市でドールトン・プランを実践したというのが柿田さんの言であるが、それも或は城山のそれに似たものであったろうし、そういう風な方式をとったのも広島時代の見聞、それ前後の見聞、経験の結果であろうし、新教育の諸思潮が氏の中に以上のような形で統一されたのであろうと考える。以上の事に関連して更にもう一つの事を問題にしたい。氏が実践した方式が一応以上のものであったとして、それならそれで特別教室2が1に減り、図書室もなかったというのは新教育実践上、問題になるのではなかろうか。それらは共に行政の都合でそうだったのであって、罪は行政にあって、強ち氏の手落ちといえまい。上述の如く、大正12年の長崎県は本県大正繁栄期の中にある不景気な沈滞した時であったし、後述のように実は彼を招聘したという視学山崎哲三は新教育に対し必ずしも許容的であったと言えぬし、却って費用、設備等々の点に関しドールトン・プランに対し難じてさえいるのである。たとえ高梨氏が上記の点で不平を言ったにしても視学には公的立場もあり、それに上記のような事情であれば特別教室、図書室の事はどうにもならなかったと考える外はあるまい。何れにしても然し、それは問題として残る点であろう。

問題になる点と言えば、移動教室にしたのも、児童の急増、従って教室の不足、それを解消するための方便で、必ずしもドールトン・プラン実施のためのものでなかったと思える節がなくはない事である。この点は若干先に暗示したが、後に詳述する積りである。

7 ドールトン・プランの消失

所で城山校の様相も時を経るにつれて次第に変わって行った。その主因は児童数の激増である。高等科併置だけならまだしも、越境転校児童が多かったようである。柿田さんは「困ったのは児童数がふえる事でした。私の組など初めは50人そこそこだったと思いますが、学年末には70名以上になり、教室は身動きも出来ない有様で、3年に進級した時には少し広い特別教室に移しましたが（筆者註・この時、特別教室は復活されたのであろうか。）、それでもぎっしりと言うほどでした。」と言う。¹⁴⁷ 児童激増は柿田さんに止まらず、第四代校長吉田正夫氏や大島義喬氏によっても指摘されていて、関係者の重大関心事であった事が判るが、¹⁴⁸ その結果はドールトン・プラン実施に致命傷を与える事にすらなったのである。柿田さんは「児童数が多い事と時々教室の物がなくなる事があったりしてドールトン・プランの実践はいろんな障碍があっ

て、長く続きませんでした。」と言う。⁶⁴後に述べるように本プランが消失して行つたのには色々な原因があるが、児童数の激増もその一つに数えられよう。

何故児童の激増があったか、この事は本稿に必ずしも無関係の事ではないと思うので、一応こゝで述べて置こう。その原因は第四代校長吉田正夫氏が「城山校は九州でも最初のコンクリート建と言われ、市営住宅の丘の上に在って、其の環境も申し分がない。」それで「通学区域外の児童が風を望み、単独寄留までして入学する有様なので……」と言うのに殆んどは尽きていよう。⁶⁵然し、更に当校がドルトン・プランの実践校であった事も児童を誘引するのに与って力があつたと言うべきであろうか。

プラン消失の原因は他にもあつた。高梨校長の辞任等がそれである。高梨校長の城山在職は1年足らずして終り、松江市学務課長に転じているが、単に松江市学務課長に転ずる為、城山校を辞任したのか、城山校に言わば希望を失って学務課長に転じたのか、どうも筆者には氏が後者、つまり城山校に希望を繋ぎ得ず、学務課長の方を選びとつたのではないかという気がしてならない。之も推測の域を出ないが、渋谷亮三氏は筆者に向つて「高梨校長は招かれて理想に燃えて城山校に赴任されたが、現実がそれにそぐわぬので郷里に帰られたのであるまいか」と語られたし、高梨校長を呼んだという当の市視学山崎哲三氏のドルトン・プランに対する理解度の低さ等もあつて、高梨氏は見切りをつけて帰郷したのではなからうか。

筆者の調べた所によると、山崎哲三氏は前記パーカストの長崎中学講演時の感想を東洋日之出新聞の大正13年5月5日号、6日号の両日に亘つて寄せているが、それによると彼はパーカスト女史の努力に敬意を払うと言いつつも、その効果には或る種の不安を覚えると述べている。彼はそこで大要次の如く言っている。同女史のプランは多大の刺戟を与えるであろうが、我が教育界はそれ程行詰っていない。行詰つたと思うのは現在の制度に飽いたからである。ドルトン方式は一種の自学自習であるが、これは又一種の詰込み主義である。このプランも定められた学科を学習せねばならぬからである。一方採用するには設備もいり、費用もかゝり、優秀教員も必要であり、プランを実施している学校があると聞いても信を置く訳に行かぬ。もしありとすれば自学自習を実行しているに過ぎぬ学校ではないのか。自学自習はドルトン式の一部であるが、その全部ではない。弊害、影響、負担を大いに研究せねばならぬ。先に千葉県で全国に先んじて自由教育法を実施したが、今日果してどうなっているか。云々、と⁶⁶筆者が指摘する迄もなく、此処には誤解もあり、詰込主義と断ずる点など本質を見誤っている点もあり、設備、教員、費用の点を問題にしている点は誰しも問題にする所であるとしても、それでも教育官僚らしい発想法である事を痛感させられるのは筆者のひが目であろうか。その他、新教育運動に対する好意もさまで感得出来ず、視学という公的立場もあつた事を考慮に入れても、総体的に言つても筆者には官僚然とした教育観で以てドルトン方式を山崎視学が見ている事はどうしても否めないような気がする。ある意味から言つて渋谷氏の発言もそれを裏付けているのではなからうか。前述の如き県教育界の意識、前記の県議会に見られる新教育に対しチェックするような傾向、それに前述した如きその頃の県下の経済難、これらもあつて高梨氏は言わば理想に破れた形で松江に去つたのではなからうか。先に述べた如く、城山の父兄は非常に協力的で高梨氏を島根から呼寄せた力の一つでもあつたと言うし、又研究発表でもやると先生方より父兄が多く詰かけて討議に参加し傍聴する程熱心であつたとも言うが、渋谷、柿田両氏の筆者への「父兄との接触は殆んどなかった。」との言や、佐世保市に於ける父兄の対新教育観に「師弟が友人の様な親しさに満ちたため、教権が行われないと非難する向もあつた。……自由教育では興味と欲求を乱用し父兄を輦登せしめた。……選題主義の……作文中、家庭事情

を露骨に表現されて、父兄から抗議された教師もあった……」とあるのを見れば、協力的、研究的であった或る部分の父兄を除き、父兄の中には上記のような無理解、不熱心な者がいなくはなかった事が想像される。これも高梨氏の実践をチェックする力とならなかったとは言い切れまい。

無論、城山のドールトン・プランは高梨氏の辞任と同時に消失したのではなく、筆者への柿田さんの発言にもあるように、それは石田氏によって暫く引継がれたらしいし、当時の生徒、大曲敏男氏の「4年が宮内（今の渋谷）亮三先生で音楽の時間にチェロを弾いて下さった（筆者註・大曲氏は大正12年3年生で城山入学なので高梨高長時代の事である。）」。5、6年は新卒の原勝先生、せがむとよく童話をして下さった。現在日本でも指折りの童話の大家になり中央で活躍して居られる（筆者註・これは第二代桑原校長時代）」との回想文や、高梨校長の後任として、福岡県で愛の教育の研究発表をし立派な成績をあげたと言われる桑原恭助氏が赴任し、城山校でも「愛の学校」を提唱したという事などから考えると、何らかの形でそれが生き続けたとも考えられるが、高梨氏自体の教育方式は氏の辞任と共に大きく後退し、石田氏によって引継がれたものの次第に先細りとなり、遂には消失したと見る外はあるまい。高梨校長城山を去って1月経つや経たぬでドールトン・プランの考案者パーカーが長崎中学校で講演をしているのを考えると運命の皮肉を感じざるをえない。こゝで第二代桑原校長時代の事にも言及して然るべきであろうが、紙面その他の事情で本稿では暫く措き、他日に譲りたいと思う。

8 新教育運動又はドールトン・プラン実践の限界と本県教育に於ける史的意義

今迄筆者はドールトン・プランを新教育運動の一つと見乍らも、或る場合にはドールトン方式とそれ以外とを区別する必要があると考えた場合にはドールトン方式以外を新教育一般等々という混ざらわしい言葉を使っても来た事を此処で断って置きたいが、此処では両者に関しては両者が相互に影響し合っただけであろうという前言を繰返すだけで、両者を厳格に区別しないで、つまりドールトン方式を厳密にとったか否かは此処では問題にしないで、両者を一括して考え、その両者（実は新教育運動と一括して了ってよいのだが）の史的意味を述べてみる事とする。前記の如く、城山校のドールトン・プランは壱岐の純粋なそれと違って、分団式動的教育法などと混合したものであり、その意味からも以上のように扱わざるを得まい。

筆者は先に城山校のドールトン・プランの問題点を二、三述べたが、それはこゝでは繰返さぬ事として、その他、問題点となるような事を次に列記してみたい。

その第一は城山校のそれが県内、市内に如何なる影響を及ぼしたかという点である。城山校のドールトン・プランが高梨校長辞任後、石田氏に引継がれたものの先細りとなり、第二代桑原恭助氏の「愛の学校」がそれに代わった事は前述した通りであるが、桑原氏の方式がもし大正新教育運動の一環的なものであったとすれば（先に断ったように、この面の究明は他日に譲らざるを得ないが、恐らく新教育運動の一環的なものであったろうと筆者は想像する。）、高梨方式も何らかの形で生きたとも考える事が出来る。然し、厳密に高梨氏の方式のみに限定して考えるとすれば、高梨氏辞任と共にそれは一時的に後退し、石田氏に継承され乍ら先細りとなって衰退して行ったと考えるより外はないようである。前者の解釈をとったとしても、後者の解釈をとれば尚更のことであるが、何れにせよ、筆者には城山校の方式はある程度の限度を以てしか広がらなかったのではないかと、少くとも同プラン（実は純粋な）と銘打った壱岐方式程には広がらなかったのではないかと思う。渋谷、柿田両氏の「父兄との接触が余りなかった。」とか「学外参観者も余りなかった。」云々の言からも、城山プランの校外教育者への影

響はさして大きいものでなかった事が想像され、先に段々述べた同校の熱心な或る部分の父兄にその影響は限られたとも考えられるのである。評者或は筆者のこの評を酷だと言うかもしれない。たとえばそれが酷評だとしても、それが壱岐方式程の広がりを見せなかったというのは明確に言えるのではなからうか。壱岐には前述の如く熊本利平なるパトロンあり、小原等新教育論者達の精神的パトロン、更に考案者パーカスト女史自身の応援迄あり、而も多年の努力で築き上げて「教育王国」の名をほしいままにした実績と盛名があり、それに対し城山には壱岐に比ぶべき強力な精神的又は物質的パトロンもなく、上述のように種々の不利の条件をも背負っていた上、学校外への積極的接触もなかったもののようでもある。又城山が壱岐の盛名に被われてしまったという事もあるかも知れない。壱岐方式の生命が永かったのは事実であるし、又永らえるだけの理由も実はあったのである。どうみても城山方式は壱岐方式に一步譲らぬ訳には行かぬのではなからうか。

所で、同プランが被教育者たる当の児童・生徒達へ与えた影響はどうであつたろうか。それに関する当時の生徒が後年述べた感想又は印象は、これも先に段々述べたように「林間教室」であり、「移動教室式授業ダルトン・プラン」等々であつて（第1回卒業生井手村太郎氏、同窓会長田添正吉氏の回想文）⁶⁴ 筆者にはプランが相当強烈な印象を彼等生徒に与えたのではないかと思えるが、それ以上の詳しい事が不明なのは残念である。筆者は先に述べたように当時生徒だった人達への接触も今の所で不充分でこれも詳細は他日に譲る外はない。

以上の事に関連して、城山校が当時市内屈指の優秀校であつたと言う事にも言及せざるをえない。当時の教師又は生徒だった人達の言によれば、城山は運動に進学に市内屈指の優秀校であつたと言う。これは第二代桑原校長時代以後の事に属するが、野球大会、連合運動会にも屢々優勝し、県立中学への進学も城山で占める有様で、これらの風潮を望んで越境入学者も後を絶たなかったと言うのは、大島義喬、吉田正夫、田添正吉諸氏の言であるが⁶⁵、以上のような現象も或はプラン実施の効果と無関係であつたとも言えないのではなからうか。多くのインテリ父兄、好成绩をめざして越境入学児を送り込む父兄、その優秀な児童達、田添正吉氏によれば、「進学率にしても……立派な成績を納めたものです。その蔭にはスパルタ式の教育をされる先生もおられ、竹の根の鞭で頭をなぐられ、頭に数珠の様に瘤が並んだ事もありました」といったドールトン式とは逆の教育の一面⁶⁶ これらによって上記の優秀校という評価が生み出されたとも考えられるが、それにしても、それが同プランの実施と無関係であつたとも言えないのではなからうか。

諸、筆者は或る共著の中で、大正「新教育の限界点」として概略以下の事を述べた事があるが、それは壱岐方式も含め、城山方式は勿論、新教育運動一般の限界点を述べたものであつた。城山方式のもつ問題点は若干、先にも二、三述べたが、それは言わば城山方式のみの持つ特殊な問題点であつた。この意味で、次に城山方式も共通に持ったであろう新教育運動一般の持つ限界点を簡単に指摘して本稿を閉じたいと思う。私はその共著で大要次の如く述べた。

上述の新教育運動は日本に「児童の世紀」をもたらしたという意味で画期的意義を持ち、又それは変質せしめ乍らも、昭和初年の生活教育等々、特に新教育運動の中に形を変えつつ若干生き延びて行ったという意味でそれなりの意義を持ったと考えられるが、他面それがいくつかの限界点とひ弱さを持っていた事は否定出来ない。

日本教育史上、一新紀元を画したといつても、それは教育方法論上の革新論に過ぎなかったのでないか。この事は新教育讃美論者、土田杏村、志垣寛の自己批判として認める事でもある。成程、教育内容、教材は固定教科書、教授要目で縛られているし、況んや教育理想に至つ

ては忠良なる臣民像で固まっている当時であってみれば（本県でもそれが見られる事は上述の県議会議事録の一部にもある通りであり、柿田さんが筆者に語った言、昔は教育勅語があって、はっきりきちんとしていてよかった、それに比べると今は右、左色々あってどうしてよいかわからない云々といった言葉にも窺われる。）、方法論を越えて教育的メスを加え、固き教育的伝統の壁を突破する事は至難の業であったに相違ない。とも角、方法論ではデモクラチックな児童の形成をねらい乍ら、内容論、目的論ではそれを否定する如き忠良なる臣民像の形成をねらっていたのであるから矛盾と言えば矛盾、力弱いのが当然であった。

然し本来ならば、単なる方法論たるに止まらず、児童の自由を妨げている社会的条件を批判し、教育的伝統の壁を突き破るべきであったろう。然しそれが出来なかった所に教育勅語を中心にした教育的伝統の強さがあり、新教育のひ弱さがあった。

ひ弱さと言えば、新教育を支持していた支柱の一つ、大正デモクラシーそのものが天皇制を避けて通っているという弱点を持っていた事を想起すべきであろう。大正デモクラシーのこの点に関しては既述した。後年、来朝したヴォシュバーンが、日本が如何にドールトン・プランやプロジェクト・メソッドを採用した所で、日本の教育はその根底が保守的に出来上っていて、つまるところ、現在の日本社会を温存するに外ならぬと喝破したのも以上の意味に受け取れるし、またいわれなき事でなかった。かくて大正新教育も遂に国家に奉仕するという伝統的性格を脱するものではなかったようである。

更に新教育の主張、実践は社会的要素、社会的関連を持たなかった点で問題を残していたようである。無論、新教育もその初期の社会的つながりの希薄な時代の、児童の自発活動一辺倒の観があったのと異り、後期に至っては、当時の小作争議の頻発などという世相を反映して、生産労働というリアルな社会的場面がとり入れられて面目を改めてはいるが、それも農耕作業等を主とするといった、徹底さを欠くものがあった。後年、児童生活詩、生活童話等、生活教育運動が起った所以でもある。大正新教育が社会への密着を求め乍らも、それに徹し得なかったのも、忠良なる臣民像に縛られたという事もさる事乍ら、所謂児童中心主義、童心主義が児童の解放、自由を謳い、児童を神秘化し、童心主義を専らにした余り、児童を心理的存在者として見ても、社会的歴史的存在者として見ない所から起ったと考えられる。⁸⁾

註

- (1) 玉川大学出版部「日本新教育百年史」8 九州沖繩 p. 150 昭和46年
- (2) 増田史郎亮「長崎県における新教育運動の展開——ドールトン・プランを主として」 昭和44年
長崎大学教育学部教育科学研究報告 第16号
- (3) 増田史郎亮 上掲論文
- (4) 増田史郎亮 上掲論文
- (5) 玉川大学出版部「日本新教育百年史」8 上掲書 p. 149
- (6) 増田史郎亮 上掲論文
- (7) 長崎市立城山小学校「創立40年記念誌」昭和38年
- (8) 「創立40年記念誌」上掲書
- (9) 「創立40年記念誌」上掲書
- (10) 「創立40年記念誌」p. 10
- (11) 「創立40年記念誌」上掲書
- (12) 「創立40年記念誌」上掲書
- (13) 「創立40年記念誌」

- (14) 「日本新教育百年史」7 中国, 四国 昭和45年 玉川大学出版部 p. 224~p. 272
- (15) 「日本新教育百年史」7 中国, 四国 前掲書 p. 74~p. 131
- (16) 「日本新教育百年史」7 中国, 四国 前掲書 p. 74~p. 131
- (17) 「創立40年記念誌」上掲書
- (18) 「創立40年記念誌」上掲書
- (19) 「創立40年記念誌」上掲書
- (20) 「創立40年記念誌」上掲書
- (21) 増田史郎亮 上掲論文
- (22) 「創立40年記念誌」
- (23) 増田史郎亮 上掲論文
- (24) 「創立40年記念誌」
- (25) 「創立40年記念誌」
- (26) 「創立40年記念誌」
- (27) 増田史郎亮 上掲論文